

同時に、音もなく廊下を歩んでいた八郎の足も停った。
八郎は、納戸の前まで来ていた。

すぐ前に、台所の板戸がある。

しかし八郎は、その戸を開けようとしなかった。

開けて、愛弟子の新吾の姿を、顔を見るのがおそろしかった。

板戸一枚をへだてて、この師弟は氣息をつめ、たがいに様子をうかがっている。

ややあって、水野新吾が板敷きの向うの小廊下へ出たようだ。

小廊下をへだてて、新吾が寝起きしている六畳の間がある。

その部屋の障子が開き、また閉まる音が、八郎の耳へ入った。

自分の部屋へ入るときの、新吾の薄笑いが、眼に見えるようなおもいがする。

波切八郎は、ためていた息を吐いた。

そのまま、凝と立ちつくしている。

二

水野新吾についての、聞きながすわけにはゆかぬ悪評を波切八郎が耳にしたのは、つい三日前のことであつた。

その日。

八郎が、八千石の太身旗本・酒井内蔵助宗行の屋敷へ出稽古におもむいたとき、

「波切先生。かようなことを、お耳に入れてよいものか、どうか……」

と、酒井家の家老・中根半兵衛がいう。

「何のことでありましょう?」

「実は、な……」

「はあ……?」

そこは、屋敷の御用部屋で、中根家老が、あらかじめ人ばらいをしてあつた。

「ずいぶんと思案を試みたのでござるが、どうも、先生が御存じないようにおもわれるので……」

前置きをしてから、中根家老が洩らしたうわさ……というよりも、水野新吾の所業は、師の波切八郎にとって、

(おもいもかけぬ……)

事実であつたといつてよい。

芝の愛宕下の、三千坪におよぶ酒井邸内には、立派な道場が設けられている。

いま、徳川將軍の側近く仕える「御側衆」の一人として、幕府内でも声望が高い酒井内蔵助の家

では、代々、剣術に熱心で、殿様みずから木太刀を取つて道場へあらわれる。

したがって、家来の中にも修行にはげむ者が少くない。

家老の中根半兵衛も若いころは、八郎の亡父に、

「みっちり、鍛えられた……」

という。

波切八郎は、小野派一刀流の剣客である。

八郎の祖父・波切八郎右衛門高元が、剣客として独立し、目黒の行人坂下へ道場をかまえること

ができたのも、酒井家の庇護があつたからだ。

以来、祖父から父、父から八郎へ引きつづき、酒井家の庇護を受けてきたことになる。

それだけに、中根家老の八郎へ対する態度は眞情があふれていた。

「ときに波切先生。ちかごろは、水野新吾が供をしてまいらぬようござるな」

叫びながら、八郎は逃げる。
父の足音が、背後にせまって来た。

(あ……斬られる。父上に斬られる……)
双腕(ふたうで)突きあげるようにして、八郎は、

「助けてくれ!!」

と、喚(わめ)いた。

その瞬間に、走っている八郎の両足(ふたあし)が闇(やみ)の底に沈んだ。
深い穴(あな)のようなところへ落ち込んだらしい。

「あ、あ……」

八郎は悲鳴(ひめい)をあげた。

いや、夢(ゆめ)の中(なか)ではなく、ほんとうに気味の悪い声(こゑ)を発(は)したらしい。

その自分の声(こゑ)に、八郎は悪夢(あくむ)からさめた。

二十八歳(ふたじゅうはちさい)の、剣術(けんじゆつ)に鍛えぬかれた波切(なぎり)八郎(はちろう)の逞(たくま)しい体軀(たいく)が、脂汗(あぶらあせ)に濡(ぬ)れつくしている。

八郎(はちろう)は臥床(ふしど)へ半身(はんしん)を起し、深(ふか)いためいきを吐(は)いた。

この夜(よ)も、なかなか寝(ね)つけなかったが、思い疲(つか)れて、いつの間(ま)にか眠(ね)つたらしい。

ようやくに眠(ね)れたら、ひどい夢(ゆめ)を見たのだ。

枕元(まくらもと)に、小さな箱型(はこがた)の有明(あけ)行燈(ぎやうとう)が微(か)かに灯(とも)っている。

この行燈(ぎやうとう)は亡父(むしやう)・太兵衛(たへいゑ)が手造(てぞう)りのもので、

「八郎(はちろう)。お前にやろう」

亡(な)くなる前(まへ)の年(とし)の初夏(じゆんげ)の或日(あるひ)に、八郎(はちろう)へくれたものだ。

立ちあがった八郎(はちろう)は、東(ひがし)に面(む)した縁側(えんがわ)へ出て雨戸(あまど)を少し引き開(ひら)けた。

まだ梅雨(つゆ)へ入(はい)る前(まへ)だというのに、屋内(うち)にたれこめてい(る)る闇(やみ)が、まるで真夏(まなげ)の夜(よ)のように蒸(む)し暑(あつ)か

ったからである。

風絶(かぜと)えた戸外(こゝろ)の闇(やみ)も、重苦(おも)しかった。

縁側(えんがわ)の左手(ひだり)の、厠外(かわそで)の、椎(しい)の老木(らうぼく)が淡黄(たんわう)色の花(はな)をつけていて、これが夜(よ)になると一際(ひととき)濃(こ)い匂(にお)いを放(はな)つ。

「ああ……」

また、八郎(はちろう)は嘆息(たんそく)を洩(も)らした。

母屋(ははや)の南(みなみ)にある、別棟(べつとう)の道場(みちば)の方(かた)で、しきりに野良犬(のらいぬ)が啼(な)いていた。

雨戸(あまど)を閉めぬままに、寝間(ねま)へもどりかけた波切(なぎり)八郎(はちろう)が振り向(む)いた姿勢(しせい)のまま、身じろぎもしなくな(な)った。

寝間(ねま)の向うの、納戸(なと)をへだてた台所(だいしよ)へ、だれかがそつと入(はい)って来る気配(きはい)を感じたからである。

(帰(かえ)って来た……)

八郎(はちろう)の門人(もんじん)で、いまは、この家に暮(く)している水野新吾(みずのしんご)が外出(そとで)からもどつて来たらしい。

盗賊(たうさく)なら別(べつ)として、新吾(しんご)のほかに、この時刻(とき)に台所(だいしよ)へ入(はい)って来る者(もの)はいない。

五日(いつに)ほど前(まへ)にも、この時刻(とき)(午前(ごぜん)一時(いち))に新吾(しんご)は外出(そとで)から帰(かえ)って来(き)ている。

下僕(しもべ)の市藏(いちざう)は、台所(だいしよ)に接(つ)した長四疊(ながよひだ)で眠(ね)りこけているにちがいがなかった。

八郎(はちろう)は、厠(かわ)と湯殿(ゆでん)の前(まへ)の廊下(ろうか)を左(ひだり)へ曲(まが)った。

廊下(ろうか)の突き当(つぎあたり)りが台所(だいしよ)だ。

台所(だいしよ)へ近づ(か)づくにつれ、廊下(ろうか)の闇(やみ)に血(ち)の匂(にお)いがただよ(よ)ってくるような気がした。

むろん、これは八郎(はちろう)の氣(き)の所為(せい)なのである。

たとえ、人を斬(ころ)してもどつたにせよ、匂(にお)うほどの返(かえ)り血(ち)をあびるような水野新吾(みずのしんご)ではないはずだ。

と……。

台所(だいしよ)の板敷(いたじき)へあがった水野新吾(みずのしんご)の足(あし)が、ぴたりと停(とど)まった。

有明行燈

暗い。

暗いようできて、仄あかるい。

だが、道もなければ、周囲の風景もない。

つまり、薄暗い空間の中で、波切八郎は必死に走りつづけている。

道の土を踏んでいる感触もなく、ふわふわと空間に浮いているようできて、しかも全力をつくして疾走しているのだから、そのたよりなさ不安は、たとえようもないものであった。

波切八郎は逃けている。

大刀を抜きはらい、八郎を追いかけて来るのは、すでにこの世の人ではないはずの、父・波切太兵衛なのだ。

父は、無言で追って来る。

逃げる八郎との距離が少しずつ、ちぢめられてきた。

「ち、父上……父上、おゆるしを……」